
U F O 黙示録

リレア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

UFO黙示録

【Nコード】

N3468BA

【作者名】

リレア

【あらすじ】

夕陽射す校舎の階段、美少女とラブレター。
しかし、物語はそう簡単に上手くはいかない。
UFOに付き纏われながらも主人公の少年が苦肉の思いで美少女とのハッピーエンドを目指していく。壮大な宇宙を舞台にスペクタクルかつダイナミックなストーリーが…展開されたりされなかったり。良い意味で期待と予想を裏切ります。主に期待を。

美少女とラブレター（前書き）

中学三年の執筆力なので、至らない点は多々あるかもしれませんが
…。
楽しんでいただけると幸いです。

UFO関連の知識は素人同然なのでそちらのほうを期待してくだ
さった方は申し訳ございません。出来る限りの労力を使ってそちら
の知識も蓄えていくつもりです。

美少女とラブレター

銀で統一されたドーム型の空間の中央。形状記憶繊維の一人用ソファで短足を組み、スライムのような蜜柑色の塊を次々に口内にほおり込む者の頭上には、50インチ程の液晶画面が写し出されていた。勿論、何もない筈の空間にである。

一人の女子と男子を中心的に描いている。よくある少女漫画風のドラマなのだろうか。場面はまさに物語の終盤、雰囲気の上効果かオルゴールバージョンに変えられた恐らくドラマの主題歌なのであるうメロディーが、向かい合い手と手を重ねる二人を祝福するように奏でている。

ドラマを見ている張本人も夢見るような二人のシーンに釘付けになっており、寝る直前に暇潰し程度の興味でつけた筈の液晶画面を頭上から前方に移動させている。

集中するあまり口唇から溢れたスライムのお菓子が膝を転がり、十字線が引かれた銀の光沢輝く鉄の床に溶け込むように落ちた。文字通り、床と同化するように溶け込みながら。

「ああっ！」

ポロポロとお菓子を落としながらも、画面内の二人は頬を赤らめながらも顔を近づけ……夕陽に伸びる影法師が一つになった。

エンドロールがゆったりと流れていく。ドラマは終わったのだ。

「なっ、なんて運命的！そして美しいの！あああっ、私もこんな恋をしてみたい！でも、幼馴染みのゼフィは女の子になんて全く興味ないし……。そうだわ！これがあるじゃないの！」

画面が空中から消えると、ソファが自動的に床を音もなく移動し自室である部屋に侵入していく。パツと眼光を刺激するような照明に照らされた自室……そこには壁に埋め込む形で置かれた大量の漫画本が壁の隙間を一切残さず並べられていた。その内の右の壁の上から三段目にある、よく読み込まれ表紙の角が僅かに折れ曲がった本

を手にすると、ハンバーグのような手で漏れてしまいそうになる笑い声を仄かに頬を桜色に染めながら堪えた。

「これで、私も…恋物語のヒロインっ！？おひよひよひよひよひよひよひよ！！！」

のも束の間、静寂の後本、本、本で埋め尽くされた自室内は反響する家主の高らかな笑い声が永遠に木霊し続けた。

麗らかな春の日の午後の校舎。所属する部活を諸事情で一時間程で切り上げさせてもらい、西校舎の三階の廊下で翳りゆく日射しを背に浴びながら革靴片手に怠惰に歩く。左右上下あらゆる方向に跳ね上がる藍色の髪にやる気のなさを表すかのような男にしては垂れがちな眉をしかめる少年…いわずみれ・つみ磐董湖は、器用に薄汚れた廊下を二つに区切る白線の上を渡りながら所在なさに鞆をぶらぶらと揺らしていた。歩調は亀の歩み並みとまでは言わないものの、ここが部活により人通りが少ない時間でなければ確実に歩行者の邪魔になる速度だ。「あー、つまんね。部活も大して面白くねーし、なーんか色恋沙汰とか起こんねーかな。

こっ…どーんと」

そうこう愚痴っている間にも階段に辿り着き、これまた湖は白から赤に変化した線を千鳥足で渡りながら一段一段降りていく。

すると、湖の耳にたたたたっという上履きの小刻みな足音が届いた。それは止まることなく寧ろ近づくとつれ徐々に速度を上げてい

き、遂には足音に歩を止め階段で一步踏み出したまま立ち止まる湖の前に姿を現した。

「……！」

さながら蛇のようにうねる緋髪のポニーテールに、鳶色の瞳。チョコレート色のプリーツスカートから覗く体育会系の部活で鍛えられた余分な脂肪のないスレンダーな両脚は、太股の付け根までを校則違反である筈の漆黒のハイソックスが覆っている。

キュッと磨かれたばかりの廊下のような音が上履きの爪先から響き、加速に加速を増した走行は壁一步手前で終了を告げた。ポニーテールがぶわりと翻る。湖の方向からしたら横向きになる身体が右足の踵を支点に湖の前へと方向転換していく。鳶色の瞳が、湖を捉える。

……美少女が、そこにいた。

湖が思わずぐくりと喉仏を上下に動かし唾を呑み込んでしまう程だ。身体を後方に捻らしたまま、元に戻す事が出来ない。

美少女は少年の熱視線に気づいているのかいないのか、極めて無関心を貫きながら無表情のまま何やら今度はスクールバッグを開けて中身を漁っている。

趣味だろうか。スクールバッグには最もありふれた円盤型の地球外生命体の移動物体：UFOのマスコットがぶら下がっていた。ビビッドピンクで塗られたUFOはただのマスコットとは思えない程デイトールに至るまで精巧に造られており、操縦者であるエイリアンが乙女心を締め付けさせるようなプリティな容姿でなければ本物のUFOと勘違いしてしまっていただろう。

一瞬、丸い硝子に覆われたUFO内でレバーを動かすエイリアンの双眸が湖を睨み付けてきたような気もしたが、きつと気のせいに違いない。

「……あつた」

湖が床から生えた根に絡めとられたように固定され少女を見ている

と、少女は探し物が見つかったようで短く言葉を発すると鞆から取り出した「それ」を恥じらうように両手で隠しながら胸に当てた。知らず、湖は眼孔が極度まで見開きそれを凝視してしまう。

清廉さの象徴である真っ白な外観に、アクセントには鞆にぶら下がっていたマスコットキャラのシールが控え目ながら貼られているそれ……湖の憶測にしか過ぎないが、恐らくそれは世に謂うラブレター！。

好きな相手に自らの想いを綴って渡すという、都市伝説にすら成りつつあったあの代物が、少女の手に握られている。

もしかして、もしかして。まさかまさかまさかっ！！

期待するなというほうが無理難題だ。ここで興奮せずして何が男よ！据え膳食わぬは男の恥と言っただろうが！（若干どころじゃなく180度は意味を履き違えている気がするが）

「あの…これ…」

白魚の如き手がおずおずと胸を離れ前方…湖へと出されていく。これでもうあの手紙の差出先が湖以外有り得なくなった。念の為後方を振り向いておきたいが、生憎思考と視線を目前のポニテ美少女以外に割くなど貴様はそれでも日本男児かつと説教してやりたいくらいなので却下。美少女の一挙手一投足をこの目に焼きつかせておかなければならないのである。これが人生初のラブレター（しかも相手は絶世の美少女）になるかもしれないのだから、その一部始終を覚えておきたいと思うのは当然であろう。

単に、余りの美しさに見とれていただけでもあるのだが。

…話を戻そう。

ゆっくりと、先程の湖の歩み程のスピードで腕がゆるゆると前方に動いていく。

どくり、血管という血管が一斉に脈打ったかのような錯覚に陥りながら湖はじりじりとその時を待つ。

「これ…これ…」

…しかし、直前になって照れでもしたのか伏し目がちになりながら背後の壁へと下がっていつてしまう。そこでふと、湖は疑問を持った。

何故、少女は今から走り出そうとするかのような前傾姿勢になっているのだろうか…と。

しかし、その疑問は直ぐ様脳内から霧散する事になる。何故なら、

黄色い上履きの爪先が床を蹴り、左脚の膝が勢いよくお腹に押し当てられる。少女の華奢な身体がたった一回の蹴りで空中に飛び上がり、目標地点へとぐんぐん距離を縮めていく。突き出される両手には皺が寄るまで握り込まれたラブレター。

例えるなら、風を切る音すら聴こえる目にも止まらぬスピードは豹、遠く離れた場所でさえピリピリと迫る気迫と勢いは猪、空中を飛ぶその姿は猛禽類のそれと言えた。

「受け取ってください!!!」

…鬼気迫る表情で少女が湖に突進してきたからだった。

背中に少女の拳のダイレクトアタックが突き刺さり、こまごま鯨顔負けの反りを階段のど真ん中で大披露してしまう羽目になる湖。条件反射で真横に避けようとしたのが裏目に出てしまい、拳が見事に背中を抉りながらも中心を反れてしまった為回転式手動ドアのように湖の身体がスケート選手のように一回転そのまま壁に激突した。

「ぐえええ!?!」

潰れた蛙、または戦隊物のアニメの負け役の怪物がヒーローから攻撃を食らった時のような奇声を上げながら、壁からバウンドした湖

は録な受け身すらとれず階段から転げ落ちた。否、落下した。頭から落下しなかったがこれ幸いなのか、強かに腰を打ち付けながらも未だ意識は朦朧ながらも保っていられた。

「こんな色恋沙汰…欲しくなかった」

涙をちよちよぎらしながら呟く言葉は空しかった。

打ち付けた腰を刺激しないように持ち上げる。背中を撫でながら上半身を起こすと、背中に貼り付いていたのかブレザーから紙のようなものが剥がれ落ちた。首を捻らし窺うと、そこには湖の腰をいけない感じにやっちゃった少女が持っていた手紙が落ちていた。

そう言えばと辺りを見回すと、あの少女はいつの間にか居なくなっていた。あの高さから、助走はなかったにしても床が砕け散るような音を響かせながら真下に急加速してきたのだ。只ですむ筈がないというのに。

「一体なんだったんだよ。……まあ、今はそれよりこつちが先決か」
恐る恐る片腕を背中に回し件の手紙を掴む。眼前に持っていていき、着信がきて振動する携帯のように手をぶるぶると震わしながらもシールを剥がして、封を開ける。

中に入れられていたのは封筒同様二つに折られた白い紙。

きゆうつと胸が締まる思いで、ええいままよつと、折り畳まれた手紙を開いた。

…そこに書かれていたのは、たった一文だった。

『今日の夜10時、桜庭公園にて』

桜庭公園。

それは、市内に存在する3つの小学校の内湖が通っていた西瀬小学校の近所にあつた。

制作者の趣味か、公園内の遊具はメルヘンチックな物ばかりだ。お城の形をモチーフにした複雑に入り組んだジャングルジムには蛇行した滑り台が設置され、砂場には星の形をした不思議な砂が敷き詰められている。ブランコは何を思ったか、椅子の部分が星やハート、魚の形にくりとられているという手の込み方。人気の遊具が豊富にある為、子供達がこぞって集まる要因にもなっている。かく言う湖も小学校時代は授業が終わるや否やランドセルを玄関前にほおり捨てて遊びに行つたくちだ。

とは言え、現時刻は深夜の10時から10分前。いくら何でもこのような時間帯に好き好んで公園に脚を向けるような輩はいないだろう。

「…くれーな」

親の目を盗んで家から抜け出てこの公園に来たところまでは良かったが、公園内の思わぬ木々の量に乱立する街灯の灯りも乏しくなつてしまいまいち公園内の様子が把握できない。先程は注意力散漫で大木に額をぶつけてしまった。

「それにしても……何処にいるんだよ」

問題点はそれ以外にもあつた。寧ろ二つ目の問題点のほうが頭を大いに悩ませる要因だ。

…少女との待ち合わせ場所を知らされていない。

小さな公園ならまだしも桜庭公園は面積の広大さでも有名な公園なのだ。木々の多さも相まって先が中々見通せない。

携帯の時刻表示をまめに確認しつつ、足下が覚束ないながらも辺りを散策していると、街灯に煌々と照らされた砂場に膝をついて一生

懸命に腕を動かしている長髪の少女が目に入った。人工灯にも映える燃え盛る溶岩の如き真っ赤なポニーテールが腕を動かす度に竜の尾のように自在にうねり、髪をトップに纏めているトーションレーズが飾られたクリーム色のリボンが竜の尾とは対称的にピヨピヨコと揺れている。

「あの子…手紙の」

視線を落とせば、手元に握られていたのは太い木の棒。どうやら地面に文字か絵を描いているらしい。何を書いているのだろうかとうと亀のように首を伸ばすも、視力は1.0以下の為悲しいかな文字を書いているのは解るのだがそれ以上は把握する事が出来ない。

「……っあ」

書き終えた少女は幼児のように体を左右にゆらゆら揺らしている。誤字がないか確認しているみたいだ。鳶色の双眸が爛々と煌めいている。そうして満足すると、木の棒を星の砂にぐっさりと突き刺しスキップスキップランランで森林の陰に走り去っていった。

残された湖は幹に隠れたまま立ち尽くしていたが、少女が居なくなつたのを確認すると何故か抜き足差し足忍び足で砂場に近寄っている。街灯がしばしばして乾燥した瞳に痛い。

目印のように直立した木の棒。星の砂が四つ端にこんもりと小山を作っている。中央にでかかど書かれた不格好な六文字の言葉は。

「ブランコにて…か」

ここに来て待ち合わせ場所の指定。不可思議ではあるが、兎にも角にも指定場所に行こう。よいせつと、未だ後遺症かじんわりと痛む腰を支えながら少女が消えた木の奥に進む。乱立する数多の街灯は砂場付近のそれよりも多く、人工の光に慣れた筈が目奥が頭痛のようなちりちりとした痛感を覚えた。眉間に小皺を立て、細目で歩を進めていく。

しかし、目立つ筈の緋色のポニーテールが一向に見えてこない。反して、ぼさぼさの髪に覆われた鼓膜には蚊や蠅とは違うラジコンらしき機械音がまとわりついてくる。旋回でもしているのか機械音は

右耳左耳と交差しながらにじり寄るように音量を上げていく。否、湖が近づいていつていつていただけか。

「ポニテ美少女…確かこっちに行つた筈なのに、」

「あつ、湖くん！待つてましたの！」

「ポニテ美少女の声？でも、姿は何処にも」

「こ、これぞ感動の再会という訳なのね！！まさに王道！憧れの少女漫画的展開！」

「は？」

海色の魚のブランコが、悲鳴を上げながらも前に後ろに揺れている。が、可笑しい。持ち手の鋼の綱には人の手がかけられている様子はない。加えて、座席にも何者かが座っている姿がないのだ。

額を冷や汗が伝う。

恐怖心に唾然としているのではない。

ただ、ただ、ただ。

「地球人の恋愛を私如きが体験出来るかどうか不安ちよつぴり期待盛り沢山で挑んじゃいましたが大・成・功だったわ！！」

「こ、こ、こ」

ブランコの上、直径15センチ横幅20センチの物体がふよふよと空中に浮いている。ピンク色の円盤、ぐるりと巻かれた十字架のネットレス。透明な硝子の隔たりの奥には、怪しい飛行物体とは打つて変わってキュートでぬいぐるみのような操縦士がキコキコとレバーを動かしている。

それは、あのスクールバッグに付けられたキーホルダーと瓜二つの、エイリアンでした。

「あつ、私が手紙の少女ね。あの姿、地球上での仮の姿なの」

「じつこんな色恋沙汰いらねー……!!」

美少女とラブレター（後書き）

という訳で第一話終了です。

期待、予想。裏切れたでしょうか？

美少女はこのお話で出番終了…ではありません。いずれ出てくる予定です。

オリジナル小説を投稿したのはこれが初めてなので、誤字脱字はなるべく注意しましたがあるかもしれません…。

もし見つけてくださった方は、報告してくださると嬉しいです。即刻修正いたします。

緋色のポニーテール…キュートですよ。正体がアレですが…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3468ba/>

U F O 黙示録

2012年1月9日03時53分発行